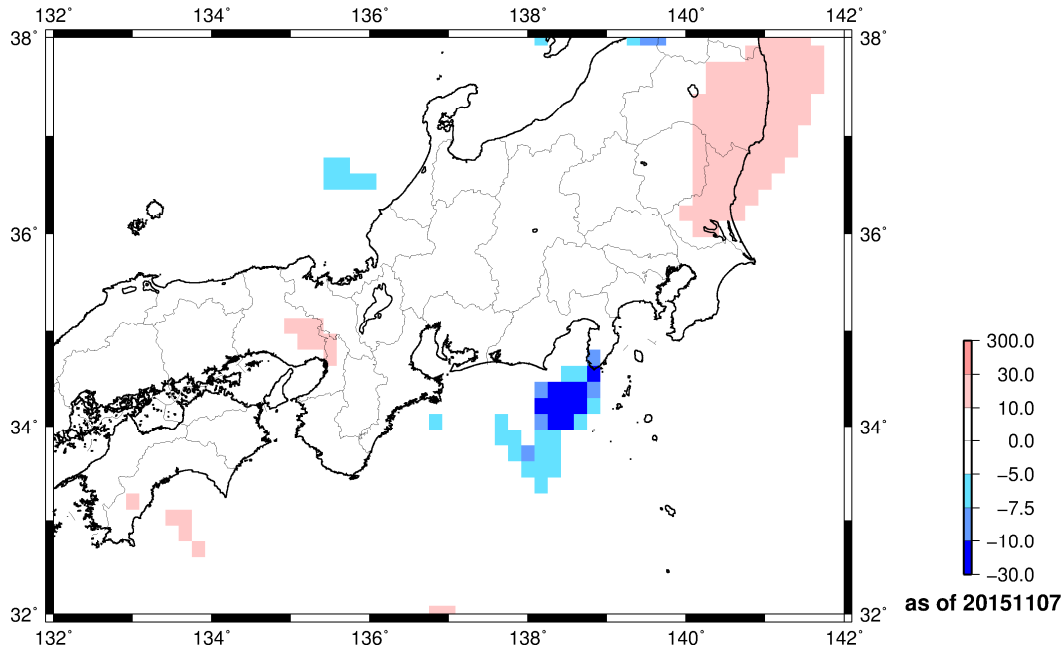


駿河湾の異常について（全国のデータ解析結果から）

前回のニュースレターでは駿河湾の沖合いに比較的顕著な地震活動の静穏化領域（青い領域）が出現していました。しかし前回の解析は陸域にターゲットを絞っており、その信頼度について今回解析することをお伝え致しました。

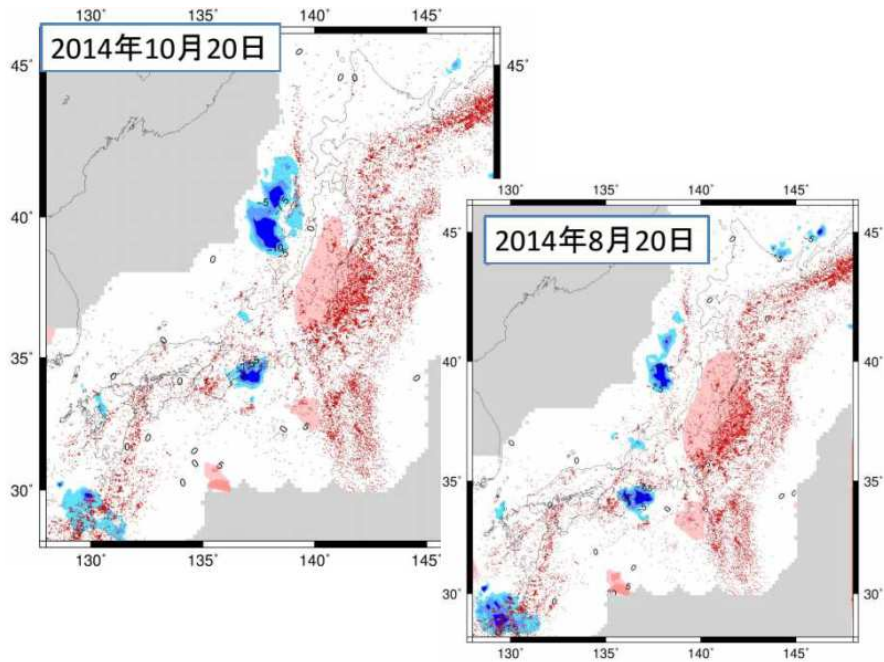
前回のニュースレターで配信した図



結論として、この青い領域の異常は、みかけ上の異常である事が判明しました。その理由は地震計は基本的に島を含む陸上に設置されています。このため、陸域と海域では地震の検知能力に差が出てきます。駿河湾沖には島はありませんので、この付近の地震検知能力はたとえば伊豆半島や御前崎周辺と比べてかなり劣る事になります。この事を「地震カタログの完全性(completeness)」と呼んでいます。つまり、日本列島では、陸域と海域では検知される地震の大きさが場所により異なるのです。たとえば陸域ではマグニチュード 1.5 という地震でも発生すれば必ず検知できるのですが、海岸から離れるにしたがって、マグニチュード 2.5 の地震でも、時には観測できたり、できなかったりする事があるのです。この観測上の制限から、みかけ上、地震の数が少ない（＝静穏化している）と判断されてしまう事があるのです。この問題を避けるために、海域でも陸上の観測網から完全に検知できるマグニチュードの大きさの地震だけを使って、今回を含め全国の解析を行っています。

次のページの解析は海域を含む領域で一樣に解析に耐えうる大きさの地震を使用して計算したものです。この図では駿河湾沖には異常な青い領域は広がっていません。志摩半島沖の熊野灘は静穏化領域（青い領域）が以前と比べて小さくなっているのがわかります。重要なのは地下天気図では『青い領域が消滅してから数ヶ月から1年程度で地震が発生する』可能性が高いという事です。ただ領域の大きさからこれは M8 クラスの巨大地震の前兆ではないと判断しています。

また九州南西沖には現時点でも青い領域が広がっています。この近くでは、11月14日にマグニチュード 7.0 という規模の地震が発生し、一時津波注意報が発令されましたが、まだ同規模の地震が発生する可能性が残っているようです。



8月20日のニュースレターでお見せした図を上にも再掲します。日本海の異常が消滅したことは、安全になったのではなく、地震発生の可能性が高くなったことを意味します。下の図は11月17日時点の地下天気図です。

